バビロンの流れのほとりにて

SUR LES FLEUVES DE BABYLONE

森 有正

筑摩書房

森　有正　もり　ありまさ
1911年　東京に生まれる
1938年　東京大学仏文科卒業
東京大学助教授を経て，現在パリ大学・東洋語学校講師
主著訳書　「デカルト研究」「パスカルの方法」
「ドストエーフスキー覚書」
「遥かなノートル・ダム」
リルケ「フィレンツエ日記」他

■

バビロンの流れのほとりにて
© 森　有正　1968
昭和43年6月10日　初版第1刷発行
昭和49年5月30日　初版第15刷発行
著　者　森　有正
発行者　井上達三
発行所　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2—8
郵便番号　101—91
振替東京4123　Tel(291)7651(代)
明和印刷・大口製本

■

(分類)1010 (製品)84011 (出版社)4604

目次

バビロンの流れのほとりにて　1
流れのほとりにて　131
城門のかたわらにて　299
あとがき　397

バビロンの流れのほとりにて

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

パリにて　十月八日

一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧するとき、そう信ぜざるをえない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に、限りなく慰めに充ちている。君はこのことをどう考えるだろうか。ヨーロッパの精神が、その行き尽くしたはてに、いつもそこに立ちかえる、ギリシアの神話や旧約聖書の中では、神殿の巫女たちや予言者たちが、将来栄光をうけたり、悲劇的な運命を辿ったりする人々について、予言をしていることを君も知っていることと思う。稚い生命の中に、ある本質的な意味で、すでにその人の生涯全部が含まれ、さらに顕われてさえいるのでないとしたら、どうしてこういうことが可能だったのだろうか。またそれが古い記録を綴った人々の心を惹いたのだろうか。社会における地位やそれを支配する掟、それらへの不可避の配慮、家庭、恋愛、交友、それらから醸し出される曲折した経緯、そのほか様々なことで、この運命は覆われている。しかしそのことはやがて、秘かに、あるいは明らかに、露われるだろう。いな露われざるをえないだろう。そして人はその人自身の死を死ぬことができるだろう。またその時、人は死を恐れない。

たくさんの若い人々が、まだ余り遠くない過去何年かの間に、世界を覆う大きな災いのなかに死んでいった。君は、その人々の書簡を集めた本について僕が書いた感想を、まだ記憶していることと思う。そのささやかな本の中で僕の心を深く打ったのは、やがて死ぬこれらの若い魂を透きとおして、裸の自然がそこに、そのまま、表われていることだった。暗黒のクリークに降り注ぐ豪雨、冴え渡る月夜に、遙かに空高く、鳴きながら渡ってゆく一群の鳥、焼きつくような太陽の光の下に、たった一羽、濁った大河の洲に立っている鷺、嵐を孕む大空の下に、暗く、荒々しく、見渡すかぎり拡っている曠野、そういうものだけが印象に今も鮮かにのこっている。そこには若い魂たちの辿ったあとが全部露われている。しかもか

れらの姿はそこには見えないのだ。このことは僕に一つの境涯を啓いてくれる。そこには喜びもないのだ。悲しみもないのだ。叫びもなければ、呻きもないのだ。ただあらゆる形容を絶したDÉSOLATION とCONSOLATIONとが、そしてこの二つのものが二つのものとしてではなく、ただ一つの現実として在るのだ。もう今は、僕の心には、かれらが若くて死んだことをかなしむ気持はない。この現実を見、それを感じ、そこから無限の彼方まで、感情が細かく、千々に別れながら、静かに流れてゆくのを識るだけだ。これは少しも不思議なことではない。極めてあたり前のことなのだ。ただたくさんのものが、静かに漲り流れる光の波を乱して、人生の軽薄さを作っているのだ。人間というものが軽薄でさえなかったら……。

僕を驚かすものが一つそこにある。いま言ったことは、人間が宇宙の生命に瞑合するとか、無に帰するとか、仏教や神秘哲学がいうしかじかのこととはまるで違うのだ。もっと直接で素朴なことなのだ。ライプニッツというドイツの哲学者が単子説に托して言っているように、この限りない彼方まで拡ってゆく光の波は一人一人の人間の魂の中に、さらにまたそれに深く照応する一つ一つの個物の中に、その全量があるものなので、あるいはそういうものが人間の魂そのものと言ってもよいかも知れない。しかしもうこういう議論めいたことは止めよう。つまり一人の人間があくまで一人の在りのままの人間であって、それ以上でも、それ以下でもない、ということが大切だ。

紗のテュールを嵌めた部屋の窓からは、昨日までの青空にひきかえて、灰色がかった雲が低く垂れこめる夕暮の暗い空が、その空の一隅が、石畳の道の向う側にある黒ずんだ石造のアパートの屋根の上に、見える。パリの秋はもう冬のはじまりだ。すこしはなれたところにあるゲーリュサック街を通る乗用車やトラックの音が時々響いてくる。小さいホテルの中は、何の物音もしない。本やノートを堆く重ねた机の前に僕はこれを坐って、書いている。これがすくなくとも意識的には虚偽の証言にならないように、ただそれだけを、念じながら。人間が軽薄である限り、何をしても、何を書いても、どんな立派に見える仕事を完成しても、どんなに立派に見える人間になっても、それは虚偽にすぎないのだ。その人は水の枯れた泉のようなもので、そこからは光の波も射し出さ

ず、他の光の波と交錯して、美しい輝きを発することもないのだ。自分の中の軽薄さを殺しつくすこと、そんなことができるものかどうか知らない。その反証ばかりを僕は毎日見ているのだから。それでも進んでゆかなければならない。

考えてみると、僕はもう三十年も前から旅に出ていたようだ。僕が十三の時、父が死んで東京の西郊にある墓地に葬られた。二月の曇った寒い日だった。墓石には「M家の墓」と刻んであって、その下にある石の室に骨壺を入れるようになっている。その頃はまだ現在のように木が茂っていなかった。僕は、一週間ほどして、もう一度一人でそこに行った。人影もなく、鳥の鳴く声もきこえてこなかった。僕は墓の土をみながら、僕もいつかはかならずここに入るのだということを感じた。そしてその日まで、ここに入るために決定的にここにかえって来る日まで、ここから歩いて行こうと思った。その日からもう三十年、僕は歩いて来た。それをふりかえると、フランス文学をやったことも、今こうして遠く異郷に来てしまったことも、その長い道のりの部分として、あそこから出て、あそこに還ってゆく道のりの途上の出来ごととして、同じ色の中に融けこんでしまうようだ。

たくさんの問題を背負って僕は旅に立つ。この旅は、本当に、いつ果てるともしれない。ただ僕は、稚い日から、僕の中に露われていたであろう僕自身の運命に、自分自ら撞着し、そこに深く立つ日まで、止まらないだろう。

マントンにて　十月九日

パリから南仏へゆく幹線の夜行列車。三等のコンパルトマンにのっているのは遊び人じみた、五十恰好の、きちんとしてはでな服装をした親爺、二十歳くらいの兵隊が三人、それに僕の五人だ。このおやじはちょっとみるとイギリス人の様にみえるが、言葉は正真正銘のフランス人のフランス語だ。あたりの人にやたらにはなしかける。だいたい南仏のコート・ダジュールにゆくのなら汽車なぞ三等で結構だから、服だけ一着ごく上等なのをもって行く。泊るホテルはニースならリュー・ド・フランスあたりの安ホテルにして、カールトンとか、カンヌな

らこれもカールトンとかミラマールとか一流のホテルのサロンに行ってお茶を一杯のんでいればよい。百二十フランでよい音楽がきけるし、話し相手はいくらでも出てくるし、美しい女とも話ができてもっと先までゆくかもしれないし、そうするに限る、なぞと言っていた。南仏をよく知っている君にはその雰囲気が判るだろう。僕はそんな話は一向面白くもないから、よい加減に返事をして、ちょうど立つ前にクリューニーの近くのサン・ジェルマン大通りの本屋で買った、鈴木大拙博士が禅のことを書いた本の仏訳を読み出した。《Le Non-Mental selon la pensée Zen par D. T. Suzuki》という本で英語から仏語に訳したものらしい。訳者はユベール・ブノワという人でセルクル・デュ・リーヴルというラスパイユ大通りの本屋が出版している。この間、ラ・トウール・モーブール街にあるギー・Cのアパートに夜遅くあそびに行っていた時、ギーがこの本のことをはなしていたのと、何とかいうイエナの近くの出版屋から雑誌原稿をたのまれていたので、何かの足しになるかと思って買ったのだ。読み始めて見ると、八日の手紙に書いたようなことが書いてあるので、思わずつりこまれて読み進んだ。人間が自分の本体を見てそれを知ることと、万物が、一応無に帰しながらこの本体の中に、よく研いた鏡に映るように、その本来の姿で現われることが書いてあるが、八日の手紙で書いたように、僕にとって重要なのは、そういうことについて言われる悟りとか何とかいうことではなく、人間が虚しく、あるいは無心になって、それを透きとおして自然が見えるようになる時、僕が感ずる一つの感情、DÉSOLATION と CONSOLATION とが一つのものとして感ぜられるあの感情、あるいは感覚、と言った方が適当なのかも知れないが、そういう感情のことで、それがあたりまえのことであるだけに、実に貴いものに思われることなのだ。そしてこの感覚は哲学とか宗教とかいう大げさなことである前に、人間の日常の一つ一つの態度の中に出てくるのだ。これは諦めとか絶望とかいう消極的なものでもないし、恋愛や仕事がうまくゆかない末に出てくる逃れ路のような感傷的なかなしさでもない。僕は人間が人間らしく在るということは、このことだけだと思っている。どんなに猛烈な恋愛に熱中している時でも、仕事が立派に進んでいる時でも、本当の人間にはいつでもこれが伴っているのだと思う。

なぜ世界の多くの人がパリに牽かれるのだろう。君のすきなカルティエ・ラタンには、白人も黒人も黄色人種も、アラブ人も、いかにも楽しげに、満足げに歩いている。その人たちは自分の国に帰りたがらない。すくなくも帰りたがらないようにみえる。僕の友人の日という眉目秀麗なイラン人の医者は、この間、カルティエ・ラタンにあるかれの小さい部屋で、スペイン音楽のレコードをかけながら、そのことをしみじみ語っていた。かれはヴァル・ド・グラースの内勤の医者だったが、パリにはもっともっといたいが、外人はよい仕事がえられないから来年帰国してカスピ海に近い、アゼルバイジャンの病院に勤めるのだと言っていた。かれが淹れてくれたコーヒーは濃厚で、美味しかった。こういう風に、外国の人人が、パリに牽かれるのは、僕がこれまで書いてきた悲しみと心の慰めとが一つになっている感情が感覚となって、パリそのものの中に結晶しているからではないだろうか。アパートの屋根の間から見える雲の流れる空の一隅、リュクサンブールやモンソーの赤や黄や紫の鮮かな花壇、新聞売りのおじいさん、ゴム風船をもち歩いている可愛らしい女の子。それは何と言って形容してよいか判らないものだが、実に明らかにそこに一つの深い人間的な感覚が働いている。前に僕がつけた日記の一節にこういう感覚を表わそうとして書いた箇所があるから、よく書けているわけではないが、そこだけ引用して君に見せよう。

「六月十二日……ずっと登ってゆくと凱旋門まで達している幅のばかげて広いアヴニュ・ド・ラ・グラン・ダルメが、反対の西の方につき抜けているマイヨ門の、白い雲が悠々と流れている明るい初夏の空がひろびろと拡がっている、広場には、なま暖い朝風が一面に吹いていた。茫々とした、白ちゃけた薄ケ原か、枯れかけた葦の疏らに生える荒涼とした淋しい河原をどこか連想させるこの場末の広場の上に、太陽はもうかなり高く昇り、熱い光線が、雲の切れ目を通して、『夏』を体の中まで泌み込ませるように、注いでいた。ブーローニュの森へ続く散歩道を覆っているマロニエの深々とした、柔く明るいみどりは、流れる水の中の藻のように、そよ風の中で静かに揺れていた。底抜けに陽気で、限りもなく悲しい音楽を流し出すジプシーの遊覧小屋は、この時間には寂然

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

として、人ッ子一人見えない。前晩サン・セヴェラン街の安宿に友だちと身にさし迫る問題について語り明してしまった私は、疲れた重い頭の痺れるような感じと朝のコーヒーで妙に興奮した感覚との交錯する空白な体を、広い舗道を横切る、アスファルトに大きな釘を打った、安全歩道に沿って搬んでいた。僕の足取りはなんだか宙に浮いていた。それでも硬い道に触れる新しい靴だけは快かった。高級車が、人通りのまだまばらな大通りの上を、何台も高速度で滑るように走りすぎる。頭の中では想念が殆ど自働的に旋廻する。その想念はこう繰り返していた、『僕は僕のヴェリテに従ってのみ自分の思考と行動とを規律しよう。それに反することは一切しないことを決意する。』何かこの言葉自体に重要な意味でもあるかの様に。左手のペレイル大通りの広い歩道の上で二人の中年の男女がよりそって何かはなしている。男は、半分はげ上った頭をして、趣味のよいグレーのダブルに、青一筋の斜めに入ったくすんだ赤のネクタイを、青無地のワイシャツにきちんと締めている。かれの目は女のことではない、何かほかのことを考えているような、表面だけの愛嬌を作って、自分によりそって来る女の一挙一動を注意深く見ている。女は妙に着こなしが悪く、季節外れのぼたぼたした黒地の外套が暑苦しそうだ。女は宙を見つめながら、思いつめたような調子でしゃべっている。『ジァンの方もうまくゆかないし……。』すれちがいざまにそんな言葉が耳許をかすめた。恋人ではなさそうだ。街燈のみどり色のペンキを塗った鉄の柱が、二人の傍に冷酷に立っている。広場の遙か向うのグラン・ダルメとペレイルとの角の、平たくみえるカフェーのテラスに、ガルソンの白服の姿が妙に大きく浮び上るように立っている。その前にリュクサンブールから来る自働式ドアのついたピカピカひかる最新型の八十二番線のバスが止って、ぞろぞろ人が降りている。

ブルヴァール・ペレイルのP氏のアパート。氏はもう外出していた。夫人は私に、夕方五時にユニヴェルシテ街のL書店で会えるだろうと言ってくれた。『畜生！世界中どこへ行っても同じことだ。』アパートの階段を下りながら私はこう呟いた。まだ午前十時半。宿料のとどこおっているホテルへかえるのは嫌だった。夕方の五時までの六時間半の時間が空虚な重みで私の心にのしかかった。『何とか少しでも有効にこの時間をすごさなけ

れば……。』私の心は無意識にそう考えていた。表に出るといつのまにか日は高く昇り、油のしみた舗装道路は眩しい、思いきり明るい、夏の日の光を照り返していた。その硬い道をふんで、さっき遠くから広場ごしに見たグラン・ダルメとペレイルとの角のカフェーに入り、テラスの黄色い籐椅子に腰を下ろした。ペリエ水以外のものは何も飲みたくはなかった。青いブルーズを着たアルジェリアの男が三人、眼の前のメトロの入口を三方から囲む鉄の欄干にもたれて、なまりの多いフランス語でしゃべっている。パリには到るところにこういう人間がいるが、かれらが何をして食っているのか一向に判らない。アルジェリア人ばかりでなく、フランス人の中にもたくさんいる。かれらの体全体は気安さと、そこはかとないかなしみを表わしている。削げたようにやせこけた体、日に焼けた皺の多い皮膚、黒目がちの鈍い眼はどこを見ているのか判らない。かれらの体全体は、再びかえらぬ時、あるいは、花咲くことなく枯れ朽ちてゆく時の嘆きを発散している。一つの肉体、一つの生命が生れ、生長し、あらゆる欲望と快楽と幻滅との中に生き、やがて自から自己の生命を消耗して枯れ死んでゆく、こういう万人に共通の生物学的大真理を、かれらは何の飾りもなく、目の前に見せてくれるようだ。僕はこういうアルジェリア人を見るのが大すきだ。かれらは思想をもっていない。精神さえもっていないのかも知れない。かれらは輝く太陽の降り注ぐ、まっ青な地中海に切り立つイベリアやアフリカ、あるいはコルシカの岩壁に生えている香り高いジュネヴリエやミルトの灌木のようだ。かれらは、ダンスと女とリズミカルな音楽がすきだ。それから近東料理のシシケーバとリュルケーバとピラーフ米とアルコール分の強いロゼ酒がすきだ。かれらはいつも真白な糊のくずれないワイシャツを着ている。かれらを見ていると一種の純粋のノスタルジー、感覚のノスタルジーが湧いてくる。それはかくされていて表面には出ないが、恋というものをする宿命をもった人間の淡い本能的な憧れの一つの極限をなしている。かれらの恋は感覚の興奮と同じ長さの持続性と同じ程度の強度しかもたない。激しく短いこと、そして次第に衰えてゆくこと、これがかれらの恋の姿だ。マイヨ門の白じらとした広場を背景にしたかれらの影絵姿は、鉄の柵にもたれたまま、じっとしている。それは感覚と神経と反射中枢とだけでできた人間だ。

愛情も歓喜も悲哀も、この反射組織を、ダンスと女と音楽と食物と酒とに結びつける機能にすぎない。かれらにとって賭は、思考の作用ではなく、かれら自身の存在を抽象化してみる本能の働きだ。この透明な人間たちは、人が恋をする時の理想、意識されない理想ではなかったのか。かれらはメトロの硬い鉄柵にもたれて何を待ち何を考えているのか。愛ということで人が求めているものの、ぎりぎりの、裸の真実、もうそのうしろには何もかくされてはいない、それ自体で全部である愛欲の裸の姿。愛ということは、二つの人間が合わさることだと誰かが言っているが、かれらは女に対して合わさることしか考えない。

マイヨ門の朝風は、かれらの存在の中を吹き抜ける。……しかし私は、私の条件から出発し、それを通ってゆかなければならない。私はもう半ば以上つめたくなったカフェー・クレーム（ペリエ水を飲みたかったのに、私はいつの間にか註文したものとみえる）を思い出したように飲んだ。右手にみえる森から香ばしい微風が吹いて来る。私の中の何かが落ちついてくる。胸ぐるしさがとれて急に爽快な気分になる。これは何のしるしだろうか。より真実になったのか、より虚偽になったのか。」

長々と引用したが、これは僕がパリ生活の中にたくさん経験する感覚と心情とを映す虚しいエピゾードの一つだ。そしてそれらはみなある静けさに還ってゆく一つの感覚的特色を帯びている。これは言葉ではどうにも言えない。君にはよく判るだろう。歳月に洗いさらされて黒ずんだアパートの石の壁、リュクサンブールの深々としたマロニエ、サン・ミシェルの広場から見た重厚なノートル・ダムの横顔、そういうパリの町々が時々にあらわす様々の姿が、そういう心のエピゾードと同じなのだというほかはない。

フランスの汽車は速い。もうディジョンもすぎた。それからリヨン、ヴァランス、オランジュ、アヴィニオン。夜があけて、マルセイユから逆行する列車が右にまわって、コート・ダジュールのコースが始まろうという時、右手に遙か遠く、高い岩山の頂上に、マルセイユの守護、ノートル・ダム・ド・ラ・ガルドの伽藍が、空に浮ぶように、朝靄の中にかすんで見えた。僕は殆ど泣き出しそうだった。それからシオタやバンドールの海！　何とい

う深くしかも柔かい青さ。去年の夏、僕は午前十時頃バンドールの波打際でニース行のバスから唯一人降りた。そこは海岸だった。君は知っている。僕があわてて一日日を間違えて君に手紙したので会えなかったことを。その時、海岸は妙にしずかだった。時々猿股一つの男やビキニの女がカフェーから出たり入ったりしていた。何だかその辺全部がはだかの男の日に焼けた焦茶色をしているような気がした。妙にしんとした雰囲気だった。やがて十五分ほどたって僕は再びバスにのってトゥーロン、イエール、ラヴァンドゥー、サント・マキシムを通ってニースに行った。前後してしまったが、マルセイユのことにもどろう。

丸三年前の九月の末、僕はマルセイユの旧港の近くのバーに入っていた。ある一人の友だちと話をしていた。日本からここに着いたばかりなのに僕は日本へかえりたかった。パリへ行くのが恐くてたまらなかった。そこには必ず僕の手に負えない何かがあるような気がした。僕と一緒にマルセイユについたその友人は、戦前五年間フランスで美術史を勉強した人だった。その人は僕のいうことをきいてそれが本当だと言ってくれた。しかし日本へかえる旅費もなかった僕は、結局重い心を抱いてパリへ来た。僕はその時日本へかえってしまうべきだったのかもしれない。しかしパリへ来てしまったのだ。来てしまって僕の恐れていたことが本当だったということを骨身にしみて知ったのだ。マルセイユで僕の感じた恐れは何だったのだろう。それはくり返しになるがそこには僕の手に負えない何かがあるのだという予感だった。この予感は日本を立つ時、すでにかなりはっきりしていた。僕の乗っていた汽船ラ・マルセイエーズが、スエズを通って、アジアの水域から地中海に入った時、僕はもうなかば諦めてしまっていた。あと三日でマルセイユに入港する。これはもうどうにもならない事柄だった。僕の感じた恐怖をもう少し分析してみると、パリには僕にとって何かどうにもならない、密度の高い、硬質のものがある、という感じだった。そしてパリの方は僕を全然知りもしないし、必要としていないのだという感じだった。人は、僕の方こそパリを必要としているのだ、僕はパリに行ってたくさんのことを学ぶのだというだろう。しかしこの考えは僕に関する限りまちがっている。いったい

人はパリに行って何を学ぼうというのだろう。頭の悪いのもよい加減にしないといけない。そんなことは全部吹けばとぶようなことなのだ。パリに行って、自分のためになるように学べることは全部日本で学ぶことができるのだ。

汽車がマルセイユを出てコート・ダジュールに入ろうとした時、僕は、遙かにそびえるノートル・ダム・ド・ラ・ガルドの聖堂をみて、殆ど泣き出しそうになった。僕の運命の道標のように思えたからだ。君は、僕の今言っていることの意味を、本当に判ってくれるだろう。僕は三年前にノートル・ダム・ド・ラ・ガルドに田中希代子さんたちと一緒に登った。日曜の午後の三時頃で、晩禱のグレゴリアン調の聖歌が、山の上の小さい聖堂をみたして、波の様に流れていた。水夫たちが聖母に献げた船の模型がたくさん天井から吊り下っている。会衆は堂に充ち溢れるほどだった。僕の感動は大きかった。教会の上には南仏の青い空が拡がっていた。岩山の頂上には強い風が吹き荒んでいた。眼の下にはマルセイユの港が、青い波と長い防波堤と幾千幾万の家々の屋根とで、巨大な人間の営みを表していた。極東からはるばる乗って来た二万トンの巨船ラ・マルセイエーズも、その中では、角砂糖の一つよりも小さい一塊でしかなかった。この光と風と岩と海との、自然の四元のみたす広袤の中に、厚い石の壁に囲まれ、岩山の上にしっかり据えられたノートル・ダム・ド・ラ・ガルドの聖堂の内部は、全く別の世界だった。幾百の人が跪いて、聖歌をとなえていた。香の煙は乱されずに縷々として立ちのぼり、蠟燭の焔は、窓のない、暗い内部を柔和な光で仄かに照していた。それは文字通り「我らの避け所なる神」を如実に示していた。タントゥーム・エルゴーやアヴェ・レジーナ・セロールム、もう二十年も前から九段にあるフランス人の学校の聖堂で知っているグレゴリアンが、ここでも唱われていた。外形だけを見てはいけない。僕の古い恩師のヘーゲリ先生は、僕が神戸を発つ時、横浜から手紙を下さった。その中に "Vous ne manquerez pas de saluer de ma part la Vierge de la Garde" (ガルドの聖母に、忘れずによろしく伝えて下さい) という言葉があった。僕はカトリックではない。しかしこの精神のメッサージュを携えて極東からはるばる来り、それを果したよろこびは大きかった。そしてこの喜びは芸術的感動と

いうものとはちがった、もっと内密なものなのだ。マルセイユには、造形的にみると、港の反対側にあるロマン様式のサン・ヴィクトル教会以外には注目すべきものが余りない。しかしその時はそういう問題ではなかった。ルオーの描いたあの美しい "Intimités chrétiennes" その潔よい、男性的なアンティミテですべてを結ぶ感動に僕はうたれたのだ。それはキリスト教の言葉を使えば MISÉRICORDE というのだろう。それは、先刻僕の言った DÉSOLATION と CONSOLATION とが一つに融合している魂の感覚が宗教的に深く表われたものだといえないだろうか。こういうもの全体を表わす適当な言葉を僕は知らない、あるいはそんな言葉はありえないのかもしれない。僕は君の知っている様に、その後たくさんの有名な教会を見た。パリのノートル・ダム、サン・ドニ、シャルトル、ランス、ラーン、アミアン、ボーヴェー、逞しい塔のそびえるバイユー、複雑な美しさをもつルーアン、レース織のように繊細に高く立つクータンス、そしてブリュッセルのサント・ギュデュール、激しい意志を表わすアルビ、典雅で静穏なフレジュス、トウルーズ、カルカソンヌ、モワサック・ルマン、怪物の様に巨大なスペインのブルゴス、トレド、ひなびた美しさの溢れるセゴヴィアやアヴィラのロマン様式の諸教会。その他数限りもなく見た。しかしその感動の種類は自ら異っている。ヨーロッパの諸教会が、草莽時代を出てからビザンティンのスティルをうけついで、しかも粗樸な、自己の感覚の示すあとを辿りながら、ロマン、ゴチック、ルネサンスというふうに経て来た建築様式の推移のあとは、それ自体精神の覚醒の一つの見事な曲線である。アルルのサン・トロフィームの僧院の美しい廻廊ではロマンとゴチックとが半々に空間を分けていて、その両者が相接している角に立って両者を眺めると、ロマンからゴチックへと、どれだけ大きな精神の発展が行われたかを、一目で感ずることができる。しかし、マルセイユの聖堂での感動は、それよりも更に深く、こういう発展の根底にたえずあった、民衆の信仰心と係り合っている。そして僕は自分の感動のあとを辿ってゆくとそれがいくつもの道にこまかく分れて、魂の記憶の薄明の中に融けてゆくのを感ずるのだ。子供の時、九段にあるフランス人の修道士達の経営する学校のパンシオネール（寄宿生）だった僕は、日夜そこの小さい聖堂でグレゴリアン

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c